アッシリア帝国東部辺境地域からの新情報
—ヤーシーン・テペ考古学プロジェクト・第１次調査（2016 年）—

New Information from the Eastern Fringe of the Assyrian Empire
Yasin Tepe Archaeological Project:the First Season (2016)

西山伸一　中部大学人文学部・准教授
Shin'ichi NISHIYAMA, Associate Professor, Chubu University

１．はじめに

新アッシリア帝国（前 9—7 世紀）は、いわゆる「古代メソポタミア文明」最大級の帝国であり、史上初の「世界帝国」とされる。アッシリア帝国の考古学研究は、ここ 15 年ほどで西アジア考古学の中で大きな注目を集めるようになってきた。その１つの要因は、これまで「未知の地」であったイラク共和国クルディスタン自治区における考古学調査が盛んになり、新たな発見が相次いでいることである。2016 年に筑波大学・国士館大学・中部大学の研究者で立ち上げた Yasin Tepe Archaeological Project (略称：YAP) は、クルディスタン・スレーマニー（スレイマーニーヤ）県最大級のヤーシーン・テペ遺跡（以下 YT）の調査を開始した。ここでは、その成果の一旦を紹介する。なお、フィールド調査は 2016 年 9 月 10 日から 10 月 12 日にかけて、遺物整理作業は 2017 年 2 月 28 日から 3 月 15 日にかけて実施された。

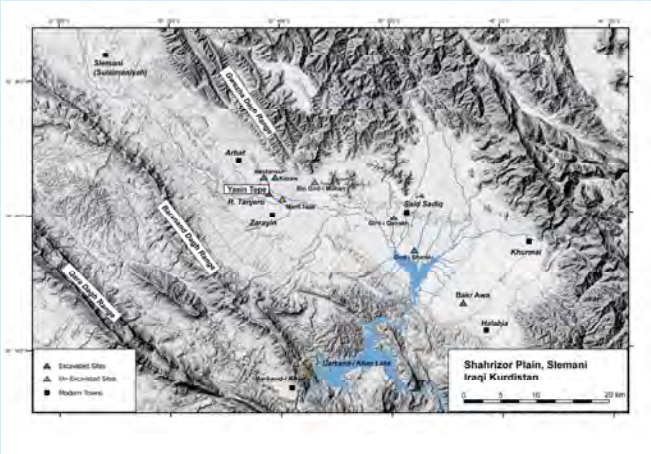

図 1：シャフリゾール平原：Yasin Tepe とその他の関連主要遺跡。

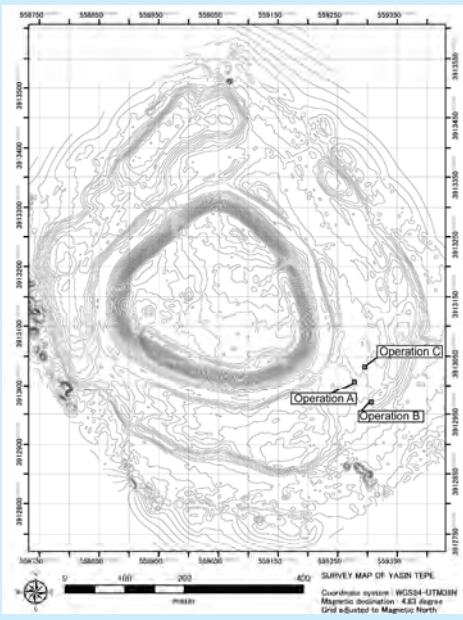

図 2：Yasin Tepe 平面図と 2016 年の発掘区の位置。

２．遺跡概要

YT はスレーマニー市の南東約 30 km、シャフリゾール平原（南北約 15~20 km、東西約 35 km）の西端に位置する（**図 1**）。遺跡の周辺はベスタンスール村近郊の水量豊富な泉からひかれた数本の水路によって囲まれ、さらに南方には平原を東から西に流れるタンジェロ川が位置する。おそらく古来より水量の豊富な肥沃な土地であったことがうかがえる。

遺跡は、中央部のテル（アクロポリス）を中心に円形状に「下の町」が形成されており、さらに外城壁が遺跡全体を囲んでいる（**図 2**）。規模は、約 700 × 650 m（45 ha）を測る。遺跡は過去にアメリカとイラクの調査団によって発掘されているが、いずれもアクロポリスの頂上部でイスラーム時代（中期）の遺構と遺物が出土している。

図 3：Operation A の Building A（写真上が北）の空撮写真。

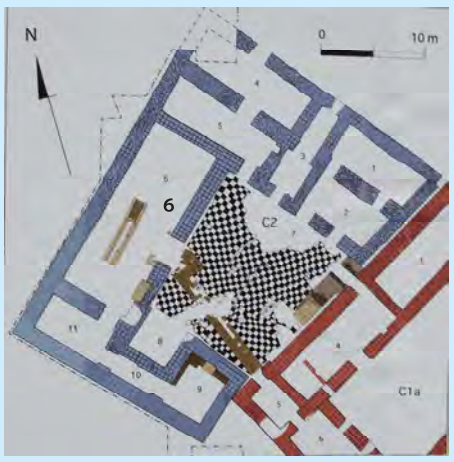

図 4：Tell Ahmar, Building C2 の Reception Suite（青色の建物の第 6 室）(Bunnes 2016, Fig. 6.3.a)。

３．2016 年の主な成果

2016 年の発掘は、「下の町」南東部の 3 か所（Operations A, B & C）で実施された（**図 2**）。最終的にメインの調査区となった Operation A は約 20×30 m を測った。

発掘の結果、Operation A からは新アッシリア時代の典型的な公的建造物の一部が出土した。Operation B からはおそらく中期青銅器時代に年代づけられる大型の日干レンガ壁が検出された。Operation C では、建造物は検出されなかったものの、大量の土器片と動物骨が出土した。いずれも表土直下でこれらの層位に遭遇している。このため、「下の町」南東部の広い範囲で鉄器時代・青銅器時代の遺構が眠っていると考えられる。

Operation A の大型建造物（Building A）（約 14×6 m）は新アッシリア時代後期に拠点集落でみられる Reception Suite（Room）の形態をもつ（**図 3**）。建造物は、中庭に面し、その入口は部屋の内側に２つのドアソケットを配する。一方、中庭は、焼成レンガと石敷きで構築されており、排水施設も完備された丁寧なつくりとなっている。出土土器から、おそらく前 8 ～ 7 世紀のアッシリア時代後期に年代づけられると考えられる。

Building A に類似する Reception Suite は、アッシリア中心部の主要都市だけでなく、帝国の地方都市でも出土している。特に Tell Ahmar (Til Barsib) の Building C2（**図 4**）や Building E1、Arslan Tash (Hadatu) の Bâtiment aux ivoires などが著名である。

2017 年の整理作業からは、アッシリアの支配地で拠点都市に広くみられる、Glazed ware（白・黄・緑／青色）（**図 5**）や Palace Ware（**図 6**）も確認できた。また興味深い発見としては、Building A の中庭から焼成された封泥片が出土している。この封泥には円筒印章の印影が確認でき、そこにはアッシリア系の二人の神が見てとれる（**図 7**）。今後さらなる研究により図像の分析をくわえたいが、この発見は、アッシリア系都市の交易システムの理解に貢献すると考えられる。

図 5：Assyrian Glazed Ware の破片（左：短頸小壺、右：壺）。

図 6：Assyrian “Palace Ware” の破片。

図 7：円筒印章の印影のある封泥。

４．まとめと展望

YT は、新アッシリア時代の拠点都市 Dur-Aššur の候補地の１つとされながらも、イスラーム時代の文化層が厚く堆積しているため、その確認は困難であるとされてきた。しかし、YAP の調査は、「下の町」の表土直下で新アッシリア時代の文化層および公的建造物が確認でき、新アッシリア時代の都市がかなりの規模で存在することが初めて確認できた。

今後は、新アッシリア時代の「下の町」の構造を明らかにしつつ、帝国東部辺境に位置する拠点都市の歴史的役割にアプローチし、帝国の支配構造の実態的解明に努力したい。

謝辞

本プロジェクトは、日本とイラク・クルディスタン（特にスレーマニー文化財局ならびに博物館）からの様々な支援を受けて実施されました。YAP のプロジェクトメンバーならびに調査関係者・関連機関に深く感謝いたします。

資金面では、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（A）（一般）「文献学・考古学の協働による紀元前 18—8 世紀の上メソポタミアの歴史研究（課題番号 16H01948）」（代表：山田重郎・筑波大学教授）、基盤研究（B）（海外学術）「古代メソポタミア北東部における歴史考古学的研究（課題番号 2630007）」（代表：沼本宏俊・国士館大学教授）、新学術領域研究（研究領域提案型）「西アジアにおける現生人類の拡散ルート—新仮説の検証—（課題番号 24101002）」（代表：常木晃・筑波大学教授）、および中部大学教育研修費の支援を受けました。

アッシリア帝国東部辺境を掘る

—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・第2次調査（2017年）—

Excavating the Eastern Fringe of the Neo-Assyrian Empire

Yasin Tepe Archaeological Project (YAP), Iraqi Kurdistan, the Second Season (2017)

西山伸一（中部大学・准教授）、ハーシム・ハマー・アブドゥッラー（スレーマニー博物館・館長）
常木晃（筑波大学・教授）、山田重郎（筑波大学・教授）、沼本宏俊（国士館大学・教授）

1. はじめに

中部大学、筑波大学、国士舘大学の研究チームからなるYAP（Yasin Tepe Archaeological Project）は、イラク共和国クルディスタン自治区スレーマニー（アラビア語:スレイマーニーヤ）県シャフリゾール平原西部に位置する県内最大級のテル型遺跡ヤシン・テペの第2次発掘調査を2017年8月26日から9月24日にかけて実施した。今シーズンは、調査区A（Operation A）で出土した鉄器時代（新アッシリア時代）の大型建造物の全容を明らかにすることに焦点を合わせた。

今シーズンの成果は大きく2つに分けられる。すなわち、1）調査区Aにおける中庭をもつ大型建造物の範囲の確定、および2）未盗掘の地下式レンガ墓の発見である。以下にその概要を報告する。

2. 鉄器時代の大型建造物

調査区Aは、ヤシン・テペ「下の町」南東部に位置する（図1、2）。調査区は、ちょうど「下の町」へ外周壁に付随する「南門」（まだ未検出）から入り、右手側の地区に位置している。昨シーズンにここから新アッシリア帝国の拠点都市でみられる「Reception Suite（応接スイート）」（以下「RS」）と呼ばれる構造の広間をもつ建造物と焼成レンガと石敷きの中庭が出土した。今シーズンは、この建造物の全容を明らかにするため。西と南に調査区を拡大して発掘を実施した。

調査の結果、中庭を囲む建造物群（Building Complex A:以下「BCA」）の全容は、今シーズン終盤にほぼ明らかとなった。この建造物群は、中庭を含めると少なくとも約17×20 メートルの規模をもち、中庭を囲んで「コの字」形に建造物群が配置されていた。中庭の北側には壁はなく、北に対してオープンな中庭であることが判明した。中庭の規模は、約12×10メートルであるが、コンプレックスの南西にあるBuilding Eが建造されたため、最終形態は方形ではなくむしろL字形を呈している。

BCAは、2時期もしくは3時期のフェーズで改築・増築されたと考えられる。RSをもつBuilding Aは、全フェーズを通じて比較的形態を変えずに存在したと思われる。ただ、南西部の奥室床面下から古い時代の壁が見つかったため、Building Aの起源は更にさかのぼる可能性がある。上記のBuilding Eは、BCA建造当初は存在しなかったと思われるが、ある時期に増築されたと考えられる。一方発掘区北西部に位置するBuilding Cは、何度か改築されており、ある段階で東側に下記の地下式レンガ墓が建造されたと思われる。発掘区の南東に位置するBuilding Dは、おそらくBuilding Aよりも前に建てられ、その後改築するうちにBuilding Aの西壁を利用して使用されるようになったと考えられる。興味深いのは、Building Dの中央部には、規模は小さいがBuilding Aで検出されたものと同じような焼成レンガ製の基壇が発見されたことである。このことは、Building DもRSとして機能した可能性が高い。この部屋の入口は中庭には面しておらず、南東に向かって開いていることから、別の建造物群の一部であったのかもしれない。

このようにわずか50～60センチメートルほどの文化層の中にもいくつかの建造物のフェーズが複雑に存在していることが判明した。今後、建造物のさらなる分析を進め、新アッシリア文化の影響を強く受けたこれらの建造物群がどのような変遷をしてきたのかを明らかにしてゆきたい。

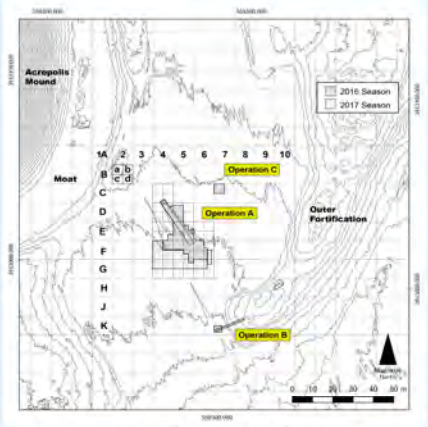

図1:ヤシン・テペ「下の町」南東部における調査区

図2:調査区Aの遠景:南東から↑

図3:地下式レンガ墓とシャフト部→

3. 地下式レンガ墓

今シーズンのハイライトは、未盗掘の地下式レンガ墓の発見である（図3）。中・新アッシリア文化に特徴的なレンガ墓は、アルビール県では報告のあるものの、スレーマニー県ではおそらく初めてではなかと言われている。しかも未盗掘であることは、この時代の埋葬研究に大きな貢献をすることを意味する。墓は、BCAの北西部に位置し、中庭の石敷きを壊して構築されていた。この破壊がいつ頃であったのかは目下分析中であるが、最終的にシャフトは開放された状態であったと考えられる。墓の形式は、アッシュール遺跡などから類例が報告されている地下式レンガ墓（Haller 1952）で、シャフト（または前室）とヴォールト天井をもつ墓室からなる。すべて焼成レンガで構築されており、幸いなことに墓室への入口は、焼成レンガでしっかりと封鎖されていた（図4）。シャフトの床にも焼成レンガが敷かれており、その中央は崩落していた。どうやら別空間が床下あるようであったが、その調査は次回に延期した。

墓室内には、崩落した奥壁隅から入り込んだ大量の土砂が堆積していた。これを除去するとテラコッタ製棺（長さ140センチメートル）が現れた（図5）。この棺は、アッシリア中心地（Assyrian Heartland）で出土する青銅製棺と同じ形態をしている（Wicks 2015）。この棺は、青銅製のものよりは価値が下がるものの、アッシリア文化の強い影響をうけたヤシン・テペの有力者一族によって使用されたと考えられる。棺の中には少なくとも5名の人骨が入っていた（おそらく女性2名、男性3名）。棺の一番底には青銅製ボウル2点、小型土器が2点おかれており、女性の一人は黄金の首飾り、指輪、および耳飾りを身に着け、手には蓋付小壺をもっていた。出土遺物や人骨については、目下分析中であるが、一族の埋葬であることは確かと思われる。

棺の下には、20～30センチメートルの堆積層があり、ここに最初期の埋葬の痕跡が残されていた。少なくとも3名の人骨が確認され、墓室の両側には10数点の完形土器が確認された。また、堆積層には、土器、青銅製品、ガラス製品、鉄製品、ビーズ類などが押しつぶされた形で散布していた（図6）。おそらく、上記のテラコッタ製棺による第二埋葬のために、意図的に押しつぶしたと考えられる。なぜ棺の埋葬の前に最初期の遺体や副葬品を取り出さなかったのかは不明である。

墓室は、約1.6（幅）×2.7（長さ）×1.2（高さ）メートルを測る。天井は焼成レンガを縦に組んだヴォールト構造で、床面は赤褐色とクリーム色の2種類の色合いをもつ焼成レンガを意図的に組み合わせて作られていた。墓室の入口部分は、レンガを水平に積み上げた（一枚半積み）壁が形成されていた。興味深いことにこの壁は、Building Cの東西壁と平行になっていた。

墓室内の奥壁にはニッチがあり、おそらくそこに安置されていた青銅製ランプが、土砂が墓室に流入した際に、下に落ちた状態で発見された（図7）。このランプは、受皿と支柱をもつ立派なものであり、ほぼ同じようなものが、1989年に発見されたニムルドの「女王たちの墓」から出土している（Hussein et al 2016:Pls. 83, 180d-eなど）。このことは、このレンガ墓がアッシリア中心地、しかも王族一族と関係があった可能性を示唆する。

墓からの出土品は、棺も含めスレーマニー博物館に一括して保管されており、今後は博物館での分析作業をすすめる予定である。

図4:レンガ墓・墓室への入口:焼成レンガにより封鎖されている

図5:レンガ墓内部に安置されていたテラコッタ製棺

図6:レンガ墓最初期の副葬品出土状態

図7:レンガ墓奥壁近くで出土した青銅製ランプ

4. 地下探査

今シーズンは発掘調査に付随して地下探査（レーダー探査）を実施した。機材はPulse EKKO Pro (Sensors & Software) で最大1.5mの深度まで探査できる500 MHzのアンテナを使用した。これまでの調査で鉄器時代の遺構は地表下50~60 cmに主に存在することからこのアンテナで十分対応できると考えた。探査は、調査区Aの周辺6カ所で実施された（YT1~6）。調査区Aの建造物の続きや、外周壁、および「下の町」への「南門」の存在を確認できるか期待されたが、今のところレーダーでは壁や構造物の存在は判明できていない。次回は磁気探査も含めて、さまざまな可能性を探ってゆきたい。

5. まとめと展望

今シーズンは短期間であったが充実した成果をあげられたと思う。YAPの目的の一つは、新アッシリア帝国の東部辺境における支配形態がいかなるものであったかを解明することである。今回全容が明らかになったBCAや地下式レンガ墓は、アッシリア中心地の強い影響を受けているものと考える。すなわち東部辺境でもアッシリア文化にのっとった生活様式・慣習を維持していたことが推測できる。今後は、「下の町」の形成過程をBCA周辺の建造物を明らかにすることで探っていきたいと考えている。また、イランや南メソポタミア方面との交流についても遺物や遺構の分析から明らかにしてゆく予定である。今シーズンの発見は、ヤシン・テペがアッシリア王室年代記に現れる拠点都市ドゥール・アッシュール（Dur-Aššur）の可能性をいっそう高めたと思う。今後文字資料の発見を期待しつつ、クルディスタン自治区の安定を願ってやまない。

本プロジェクトは資金面では、科学研究費補助金・基盤研究（A）（一般）（課題番号:16H01948）「文献学・考古学の協働による紀元前18－8世紀の上メソポタミアの歴史研究」（代表:山田重郎）、基盤研究（B）（海外学術）（課題番号:2630027）「古代メソポタミア北東部における歴史考古学的研究」（代表:沼本宏俊）、基盤研究（B）（一般）（課題番号:17H02412）「西アジアにおける新石器化・都市化プロセスの研究」（代表:常木晃）、および中部大学教育研修費の支援を受けた。

フィールド調査では、共著者以外で安間了・筑波大学生命環境系講師、柴田大輔・筑波大学人文社会系准教授、脇田重雄・元古代オリエント博物館研究員、Jeanine Abdul Massih ・レバノン大学教授、Mohamad Abdel Sater・レバノン大学大学院生、Othman Tawfeeq Fattah・スレーマニー大学講師、Rawa Karim・スレーマニー文化財局職員の参加・協力を得た。またスレーマニー文化財局（Slemani Directorate of Antiquities）からはKamal Rasheed Raheem局長はじめ多くの職員から変わらぬ全面的サポートをいただいた。フィールド調査の実施にあたり並々ならぬ尽力いただいた各位に深く感謝申し上げます。

アッシリア帝国東部辺境を掘る

—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・第３次調査（2018 年）—

Excavating the Eastern Fringe of the Neo-Assyrian Empire
Yasin Tepe Archaeological Project, Iraqi Kurdistan, the Third Season (2018)

西山伸一（中部大学准教授）・Hashin Hama Abdullh（スレーマニー博物館）
山田重郎（筑波大学教授）、沼本宏俊（国士館大学）、常木晃（筑波大学）

１．はじめに

YAP（Yasin Tepe Archaeological Project）は、イラク共和国クルディスタン自治区スレーマニー（スレイマーニーヤ）県南部、シャフリゾール平原西部に位置するヤシン・テペ遺跡（図１）の第３次調査を2018 年８月 18 日から９月 20 日まで実施した。今シーズンのタスクは以下の４つであった。１）2017 年に調査した未盗掘レンガ墓から出土した遺物の緊急的保存修復処理と整理作業、2）集落構造を明らかにするための「下の町」東半分における地下探査（範囲については図１参照）、3）「下の町」東部における考古学踏査、および４）遺跡近郊の考古学踏査である。今回の調査は、緊急性の高い１）、および２）を優先的に実施した。

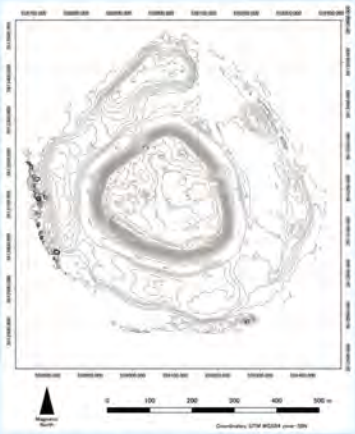

図１：Yasin Tepe 遺跡の最新の平面図：「下の町」の東半分が地下探査の範囲。

図２：2017 年に発見された未盗掘のレンガ墓。

２．未盗掘墓出土遺物の保存修復

今回の調査でまず取り組んだのは、2017 年に発見した新アッシリア時代の未盗掘レンガ墓（図２）から出土したさまざまな遺物の整理作業と緊急的保存修復措置であった。

レンガ墓からの出土遺物のうち金属器、特に青銅製品が著しく腐食しているのが目立った。これらの遺物の写真撮影や実測作業のためには、まず応急的な保存修復措置が必須であった。今回は、２週間弱の短期間ではあったが、青銅製品を中心に基本的な保存修復措置が施されることとなった（図３）。将来的にはこれらの遺物をスレーマニー博物館に展示することを考えている。そのためにはさらに時間をかけた保存修復措置が必要となってくるだろう。

図３：レンガ墓出土遺物の保存修復風景

３．2018 年の主な成果

まず、出土遺物の整理作業で特筆すべき成果が２点ある。１つは、楔形文字資料の発見である。遺物は、青銅製のトルク形ネックレスである。このネックレスは、Operation A で 2017 年に検出した小型 Reception Suite の床面直上で発見された（図４）。日本調査団としては、西アジアでおそらく４番目の楔形文字資料となる。

もう１つの成果は、棺の内部に堆積していた土壌を精査した結果、数百点に達すると考えられる直径２ミリ程度のきわめて小さなビーズ類が発見されたことである（図 4-5）。ビーズは、カーネリアン、ファイアンス、メノウ、金などからなり、この時代のアッシリア風の埋葬としてはかなり豪華なものであることが判明した。この極小ビーズ以外でも、さまざまな形態をしたビーズが発見された。このことは、被葬者はかなり裕福であったと考えられる。

今回のフィールド調査の中心は地下探査であった。これは「下の町」の都市構造を明らかにし、将来の調査戦略を考えるデータを得ようと考えたからである。地下探査は、ドイツの探査会社（Eastern Atlas GmbH）に依頼した磁気探査（図9）と、筑波大学の機材を使用したレーダー探査を実施した。

成果がでてきているのは磁気探査である。東半分の「下の町」では、さまざまなアノマリー（異常部）が検出された。興味深いのは「レンガ墓」と思われる複数のアノマリーと、探査会社が「溝もしくは運河」と呼ぶ線状のアノマリーである。このことは 2017 年に発見されたようなレンガ墓が複数存在すること、さらに「下の町」に水路のような大型の遺構が存在する可能性を示している。後者は想像をたくましくすると「水都（すいと）」のような都市構造であったのかもしれない。

図４：レンガ墓内のテラコッタ製棺から発見されたビーズ類。カーネリアン、メノウ、ブルーシストからなる。

図５：レンガ墓内のテラコッタ製棺から発見された金のビーズ

４．まとめと展望

ヤシンテペの調査は、３年目を迎え、今回は「下の町」の構造を明らかにするとこにフィールド調査の主眼をおいた。また考古学踏査も都市とその周辺の景観について新たな知見をもたらしている。レンガ墓の成果は、この都市にかなり裕福な一族がいたことを示しており、文字資料の発見は、楔形文字文化が確実に波及していたことを示している。

今後は、新アッシリア時代の「下の町」の構造を明らかにしつつ、帝国東部辺境に位置する拠点都市の歴史的役割にアプローチし、帝国の支配構造の実態的解明に努力したい。

謝辞

本プロジェクトは、日本とイラク・クルディスタン（特にスレーマニー文化財局ならびに博物館）からの様々な支援を受けて実施されました。YAP のプロジェクトメンバーならびに調査関係者・関連機関に深く感謝いたします。

資金面では、科学研究費補助金・基盤研究（A）（一般）「文献学・考古学の協働による紀元前 18−8 世紀の上メソポタミアの歴史研究」（代表：山田重郎・筑波大学教授）（課題番号 16H01948）、基盤研究（B）（海外学術）「古代メソポタミア北東部における歴史考古学的研究」（代表：沼本宏俊・国士館大学教授）（課題番号 18H00743）、新学術領域研究（研究領域提案型）「都市文明の本質」計画研究 A 02「古代西アジアにおける都市の景観と機能」（代表：山田重郎・筑波大学教授）（課題番号 18H05445）、および中部大学特別研究費（A）の支援を受けた。